

Title	(随想)松阪便り
Author(s)	杉村, 克治
Citation	泌尿器科紀要 (1966), 12(5): 421-422
Issue Date	1966-05
URL	http://hdl.handle.net/2433/112962
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

〔泌尿紀要12巻5号〕
昭和41年5月

泌 尿 器 科 紀 要

第 12 巻 第 5 号

昭和 41 年 5 月

随 想

松 阪 便 り

三重県厚生連中央総合病院 皮膚泌尿器科

杉 村 克 治

郷土史によると、ここ松阪は安土、桃山時代の末期、天正16年（1588年）戦国の知将蒲生氏郷の手により造られた城下町で、彼がその名付け親でもあると伝えられている。松阪の「阪」は元は「坂」の字が用いられていた。即ち彼が築城の折、秀吉より「大坂城」の「坂」の字を与えられたという。「大阪」も古くは「大坂」と書いた。町村制実施の時（明治22年）に甲論乙駁の末、「松阪」と改められた。余談ながら、この松阪を「まつさか」とよぶか「まつざか」か未だ確定されていないと聞く。

江戸時代松阪は商業都市として栄え天下に松阪商人の名をなした。越後屋こと、天下の豪商三井家も松阪の出身であった。この繁栄の基を造った人として氏郷は今も識者の尊敬をうけ、毎年秋には彼をしのんで「氏郷まつり」なる豪華な祭礼が行なわれる。

この松阪城の城趾は幾度かの天災地変に会い今や高い石垣と老松のみが当時の美観をうかがわしめるのみであるが、現在は公園として市民の憩いの場となっている。とりわけ春の桜花や1m近く垂れ下がった藤棚（樹令280年）はみごとである。

松阪の市街は氏郷の戦略的必要から軒並みを鋸の歯の如くし、十字路は少く、丁字型のものが多く、今も一部にその面影を残して道幅は狭くバスは立往生し車は一方通行を強いられる。

敷島の六和心を人とはば朝日に勾ふ山桜花

国学の泰斗本居宣長は松阪に生れ、育ち、ここに没した。敗戦までは宣長の国学は多くの人々の精神的支柱であった。宣長は小児科医でもあったが、それは生活のための一方便にすぎず、国学を学問的に大成した傑人で荷田春満、加茂真淵、平田篤胤と共に世に国学の四大人とよぶ。真淵が参宮の帰路松阪に宿をとった際、宣長がその旅窓に訪れて教えを乞うた。かの有名な「松阪の一夜」である。時にこの師弟は夫々67才と34才であつた。以後真淵の門に入り江戸からの飛脚便による教授をうけた。

とこのへにわがかけていにしへしぬぶ鈴がねのさやさや

宣長はこよなく鈴を愛し朝に夕にこれを振り鳴らし心を慰めたという。その書齋を「鈴の屋」と称しこの四畳半の書齋で名著「古事記伝」その他多くの著述が行なわれた。今は城趾の一部に保存せられている。

「伊勢の松阪女郎衆の名所上りやさんすな戻らんせ」と歌に唄われ、参宮道者を相手に盛えた花街としても有名であったが今はその面影もなく、わずかに市の一劃にバー・カフェー

として残るのみである。

現在松阪といえば牛肉を連想される程松阪肉の名声は高く、松阪木綿の衰退によって代って代表的特産物にのし上っている。国内はもとより広く海外にも知られ外人観光団もしばしば来訪するとの事で事実、その網焼きの美味は格別である。その中心的存在をなすのが「和田金」という老舗で松阪を訪れる賓客は先ずここに案内されるのが常である。年末、年始ともなれば門前市をなし購入せんとすれば2時間は待たされるはめになる。子牛を但馬方面で仕入れ農家の愛情と丹精により育てられる。その飼育にビールを飲ませるというのも事実らしいが、それ以上のいろいろの苦労があるらしい。又メスの肉ばかりを使い、従ってうまいが高価である。どこの世界にも安価でうまいものはないらしい。

松阪市はいくたびかの町村合併で広大な田園都市に成長した。即ち現在人口10万、うち旧市内の人口4万、市域の面積は大阪市のそれに近い。ために市内といえども親子づれのいのししやうさぎが出没しその退治に奨励金が出されているとの事である。従って旧市内に出てくるのに1時間近くバスを利用せねばならぬ所も少なくない。

この松阪に約300床を有する公立病院が2つあった。ここに4年前筆者らの病院が新設されたため、これら3病院が旧市内に隣接する結果となった。

大学ではすべて皮膚泌尿器科の完全分離した現在、これら中小病院でも漸次分離独立する機運にあるが、当院では未だ皮膚泌尿器科と一緒に標榜し筆者がいわゆる一人医長赴任と相成った。大学在職当時両者が未だ分離していなかった故、この二刀流診療に一応はさしたる不自由を感じないが、どちらも浅在的、独善的になる事を時に自ら反省している。尚新設された病院でありながら、その設計の拙さから皮泌科に膀胱鏡室をもたず、さりとて今さら改築もならず、中央手術室の一部を使用しポータブル撮影を行なっている次第である。

大学の方も医局員が少なく医員の派遣も意のままにならず、従って1人で診察し検査をやり手術をやらねばならぬ。看護婦相手に腎臓もやる。思わぬ出血をみた時に自らの血液を与えた事もある。腎部分切除や腎切石術をやった後など後出血が気になり病院に泊り込む事もある。それでも興味ある症例に出くわすと検査に手術に時間を忘れる。

年間二千数百人の新患に接するが泌尿器科患者は少なく10%余りに過ぎぬ。この数の割には興味ある症例に遭遇する事が時々ある。それを機会にジャーナルを読んで論文にまとめたいて考えてはいるがなかなか意の通りにならぬ。

この地方では未だ手術は外科とするもの、女子膀胱炎は婦人科で、小児のそれは小児科で診療するものと考えている人々も稀ではない。従って手術の対象となる症例の多くは内科、外科、小児科等より紹介されてきたものである。因みに最近の手術症例32例についてみると自ら最初に泌尿科へ受診したものは7例にすぎず、他はすべて他科より紹介されたものである。この事から患者に対する啓蒙もさる事ながら、これら他科医師へのP.R.も又重要である。折角上部尿路結石を疑いながら単純レ線で膀胱部が欠けていたり、血尿を有する虫垂炎患者が術後右尿管結石を発見される事もある。

院内の臨床集談会や雑談の際に折にふれ潜在性泌尿器疾患の発見にUrogramの重要性を強調している。この点20名足らずの医師を擁するこの病院では幸い他科との横の連絡は比較的容易である。その効用が漸く実り、これら他科においてUrogramが多く撮られ、その解説を依頼される件数が多くなっており、中に思わぬ拾いもの(興味ある症例)がある。慢性腎炎として長期にわたり安静と制限食を強いられていた症例がSilent stoneであったり尿路奇形であった症例は十指に余る。

文才のない筆者には本誌の巻頭を飾るにふさわしい文など望むべくもないが、以上思いつくままに冗文を記して責をふさぐ次第である。